

『鎌倉時代語研究』(第一輯～第十輯)索引(二)

——事項索引——

金子

彰編

凡例

一、本索引は、『鎌倉時代語研究』（第一輯〜第十輯）中の事項を採り上げたものである。但し、不採録は、本誌掲載の各論考の、注の部分と凡例の部分、更に彙報等の部分に多くある。

二、事項の項目を採り上げる際、以下の点に留意した。

1、各執筆者によつて、同一の事項でも異なる表記が見られるが、統一することはせず、そのままの形で採録するようにした。

2、検索の便をはかるため、用例は、単語単位のみならず、文意を考えて長く（熟語や文の形）採つた場合もある。

一、本索引の配列は、以下の通りとした。

1、現代仮名遣に基づいた五十音順を原則とした。

2、検索の便をはかるため、同一語を含む類似事項については、隣接して配列したので、五十音順とはなっていないものもある。

3、数字は、漢数字が第一〜十までの輯を、算用数字がその各輯のページを示している。

4、同一語は、「ヲコト点、——の種類」のように「——」で略したものもある。

ア

auの長音化した音	三11 12	言い換え語	八16	語資料としての性格	四23	一語当りの使用頻度	九08 109
ア・ワ行音の表記	三84	庵点	四137 五158 八126	移植	九189 190 191 192	一語一漢字表記	一84 五80
アクセント上声	三3	イ音便	一52 三7	已然形の用法	六102	一語多漢字表記	一68 83 84
アクセント表示	四25	医家・丹波家の訓読法	二67	位相	四83 91	一語多漢字の表記	一58 80
アクセント平声	三3	意義	の訓法 二56	位相 (特に文体上の位相)	六77 十5 6 7 19 59	一語中に於ける位置	十195
校倉経蔵	四6 10	意義差	八10 13 十45 48	——を異にする語詞の混用	八71 78	——としての定着度	十196
校倉聖教	四19	意義注	四137	位相語	十46	——のナ変動詞	八21
新しい音韻体系を持つ世代	十103	意義分類	二138	位相差	四26	——の加点年代に差	五141
新しい形	五148	生きてはたらく文末詞	七153	異体	四61 十28	——の取得知識	二132
新しい型の訓法	二62	依拠注釈書	十139	異体仮名	一98	——の漢字から成る語	四105 111
新しい訓法	三153 五149 九104	異訓(別訓)	六64	異体仮名字体	七123	——の漢字で表記される和語	五101
新しい資料	二131	移行時期	三42	異体字	七70	の動詞	五101
宛字	四42 44 56 64 68	意志の表現	六56	異体字選択の原理	六149	一字一訓	一122
改まった感じ	八13	——または可能近似	七167	異体字	七123	一字漢語	一148 二137
改まりの意識	十65	異字同訓の解説書	五96	異体使用	二25	一字漢語動詞	二136 139
安定的な伝承	十180	石山寺経蔵	四75	一音節去声字の上声化の過程	二13	一時的な誤用	十37
		石山寺所蔵	四5	一世代	十204 205	一特定用法	十111
		石山寺蔵	四5	一人称	十195 200	一和語が二種以上の漢字で表記	五107 108
		石山寺蔵の片仮名交り文所用文	四27	一句中に於ける位置	二138	一漢字——和語	五78
		石山寺蔵の片仮名交り文の国	四27	——に対して複数の訓	八60	——	十195

一種の仮名遣	172	意味・用法によつてよみ分け	院政期前半	3169	的な、かつ、一般的な方法
の漢音	719 200 201 209	る	院政期中期	1114 1118 1119 1122	
一定の日本語(特に、和語)		意味論的考察	院政期点	8117 132	院政時代初期
が一定の漢字によつて表現される	350	異名	院政期保延六年	550	院政時代初中期
一般大衆	27	依類	院政期末	1123	の字書
の下衆男の発言部	27	韻鏡の韻目順	の片仮名文	412	院政時代末期
の口頭語	28	韻書	の片仮名交り文	410 12	院政初期
一般的混乱	29	による声調の修正	の片仮名交り文・片仮名文	427	院政初期点
一般的推量を表わす助動詞	7158	の反切	の系統	420	院政末期
位置による違い	387	院政期	の句読点資料	980	院政・鎌倉時代
の違いで機能を分ける	990	6 10 11 13 57 5 7 六 87	の訓読	26	院政・鎌倉時代に於ける口語
著しい潤色	926	100 102 125 10 85 86 105 109 220	の前半頃	1123	院政・鎌倉時代に独立した文
移点	105	院政期以降	のラコト点	7124	院政・鎌倉時代に独立した文
意図的な抽象化・整理化	132	院政期以前	の文獻	36	院政・鎌倉時代に独立した文
「イ」本注記	149 150 155 156	院政期後期	院政極初期	1110	院政・鎌倉時代に独立した文
意味用法	665	院政期写本	院政時代	89	示」の表現法
の交容	667	院政期書写	院政時代	105	院政・鎌倉時代
意味用法上の準則	665	院政期資料	院政時代以降	103	院政・鎌倉初期
意味用法上の転化	665	院政期成立	院政時代以前	1196	院政・鎌倉初期
		院政期前期	院政時代頃から見られる伝統		院政・鎌倉初期の和化漢文訓読

韻尾がnの字音	四 104	打消推量(意志)の句	十一	の最古の形態	九 100
韻尾表記	三 6	訴えかける/特定の対象(相手)	三 20	としての古態	五 53 72 77
韻尾無表記	六 195	敬った表現	四 68	送り仮名	八 201
韻文	九 110 112 181 86	工	お——上——を	送仮名	八 201
韻分類音義	一 131	え——ゑ——へ	お・ラの表記	お・を・ほ	三 87
引用形態	八 62 63	(ア行、ヤ行)のエ	オとラの仮名遣	オとラのの方式	三 12
引用の態度	六 124 175	「栄」の字音	「お」で始まる語	オ段長音の短音化	三 12
韻律的關係(平仄法)	九 31	eu韻をヨウとする例	ouの長音化した音	オ段拗長音化	三 12
う——ふ	三 85	詠嘆性の強い表現	大江家	踊り字	三 83
字——字の草体仮名	七 70	詠嘆表現	——の訓法	小野の秘旨	二 7
「ウ」表記(唇内入声音)	二 95	江戸時代	王朝語彙	小野流	四 35 63 7
「う——」表記	七 71	の学者	王朝情趣	オランダ翻訳書	九 78
上に書かざるかな	二 25	の版本乃至写本	王朝的用語	音が交替	四 102
「上・うへ・うゑ」の表記の違い	十 90	婉曲的なもの言い	黄筆	音韻n	三 10 11 14 24
ウ音便	一 52 10 32 72	(氣絶の)婉曲表現	往来の句読法	音韻史	十 68
請文	四 65 70 72 76 77	縁語的用法	往来の实用化	——と表記とのギャップ	十 111
受身近似	五 96	円堂点	——の使用(学習者)	——の変化	十 113
			往来文体	——の歴史的变化	十 103
			往来物	音韻変化に伴う仮名遣の混乱	十 69
			の基本語彙		十 72

の用法	六 91 102	角筆点資料	一 125	片仮名資料	十 72	片仮名交り体の講義聞書	三 55
「へ」の用法	七 127	角筆文献	十 30 32 33 34	片仮名宣命書	一 44		
「ラ」	一 56	角筆文献としての価値	五 33	片仮名宣命体	一 88	片仮名交り体の講義聞書注釈書	三 51
学統	一 123 四 57 六 15	学問的背景	五 161	二 267 四 10 20 八 47 110			
角筆	一 125 四 7	学歴別	十 123	の宣命体	三 53	片仮名交り注釈書	三 51 53 四 35
	五 13 14 15 七 7 124 八 119	家訓	四 102 十 17	片仮名注	三 63		
で描かれた図絵	五 28	雅言	八 18	の字体	九 125 128	片仮名交り文	二 136 137 四
で書かれた言葉	五 34	過去の助動詞	四 123	の小字書	九 82	5 6 8 11 12 13 14 20 九	
でこのような文字等を書	五 34	訛語	十 32	の和歌	四 10	77 79 80 81 82 83 90 91 94	
入れた意図	五 35	下降性・軽易性	三 115	片仮名表記	一 89 九 53	片仮名交り文使用者の系統	
による一般語句	五 25	仮説	八 48 十 123	片仮名表記体系	三 67	片仮名交り文資料	四 11
の漢字	五 25	下接字の影響	二 97	片仮名表記の体系	三 64		
の経典名・仏名	五 24	の声調	九 73 74	片仮名表記の漢語	五 63	片仮名交り文と片仮名文との使用差	四 83 六 5 13
の凹み	十 30	の無声子音	二 97	片仮名付訓	九 55	片仮名交り文の起源	四 5
の寺社名	五 17 34	の有声・無声に対応	四 60	片仮名文	一 143 三 6 7	片仮名交り文の源流	九 87
の僧名、僧房名	五 20 22 34	下接無声子音字	四 47	四 11 12 七 176 九 76 十 7		片仮名交り文の書写年時	
の年紀	五 13 33	下層階級	八 32	片仮名文の起原と系列	七 176		
の平仮名・平仮名交り	五 27 35	片仮名	二 137 三 10 四	片仮名文の説話	十 16		
の梵字	五 28	片仮名字体	七 8 9 10 23 八 47 九 31	片仮名文の和歌や詞書	四 13 18		
の文字	五 13	片仮名字体の統一	五 50 十 160	片仮名文の和歌や詞書	四 13 18		
角筆点仮名字体表	七 8	片仮名字体「六(口)」	一 47	片仮名交り問答体	六 71		
				片仮名交り宣命体	四 11		
				片仮名交り文の注記	四 15		
				片仮名交り文の注釈	六 12		
				片仮名交り文の夢記	四 13		
				片仮名交り文の様式	四 23		

——で片仮名書	567	漢字一字の類音字表記	362	流(又梅尾流)	40
——の漢音読語増加の一般的趨勢	416	漢字音の国語化	975	慣習的表記法	390
——の語性	5106	——の声調	1029	勸奨の表現	7158 161 170
——の表現性	5107	——の促音化	2102	感情を表現するにふさわしい	48
——の用法	9116	——の促音化とその表示法	291 451	促音化	48
——の和語化	819	——の表記	1024	漢字用法	667
漢語語彙	999	漢字音字習	1064	——の変化	355
漢語・固有名詞の宛字	51	漢字音注	729	漢籍	351 897
漢語サ変動詞	143 2101	漢字片仮名交り宣命体	550	——の訓点資料	14
136 138 396 99 104 510 102 103		漢字片仮名交り文	542 847 110	——の訓読	8117 128
漢語專一に表現される概念	2154	漢字仮名交り文	978	——の訓法	9105 106
漢語動詞	2136 147 152 391	漢字群	2138	漢籍・仏典からの引用	282
漢語表現	821	漢字掲出の原則	1045	漢籍読の特徴的訓法	267
漢語副詞	9114	漢字使用	676	間接引用	6140
漢語名詞	9116	漢字字訓一覧	1120	漢字平仮名交り文	32
千支の読み方	427	漢字字体	85 88	漢字交り片仮名文	675
漢字	2137	——資料	550	七176 184 47	
——と訓との関係	62 120	漢字注	363	漢字交り片仮名文的表記	7196
——と和訓との対応関係	3133 141 143 145 149	漢字二字に対して和語一語を	3148	漢字交り平仮名書状	10105
——と和語との対応	3141 153	漢字二字表記の和語漢語	3148	漢字交り平仮名文	846 49
		漢字二字表記の和語漢語	3148	勸修寺	27 412 20

キリシタン資料	四 61								
キリシタン版	九 78								
キリシタン文献	二 103								
記録語研究	六 44								
記録資料	五 107	六 45							
記録体	三 10	七 177							
記録文	十 38								
記録類	六 44	四 45							
極メ書	三 2								
緊句	九 34	三 35	三 36	三 38	三 39	四 44	四 46		
禁止へーナ(ヘナソ)									
の句	七 173								
のへーナ(ヘナソ)	十 11								
の後に立つ	七 156								
禁止・否定の表現	六 87								
禁止表現	七 169	七 170							
の後に立つ用法									
近代の翻訳文	七 171								
近化語の特徴的な用法	九 78								
近代語的事象	一 51								
句点	八 3	八 4	八 5	八 6	八 7	八 8	八 9	八 10	八 11
口語り性の強いもの	八 7								
具体動作語	八 10								
ク語法	六 80	六 81	六 82	六 83	六 84	六 85	六 86	六 87	六 88
「く」形式	八 62	八 65	八 66	八 67	八 68	八 69	八 70	八 71	八 72
句切り点	九 79								
句切点	六 184								
公卿の日記	一 89	一 85	一 89	一 89	一 89	一 89	一 89	一 89	一 89
句格式	九 31	九 33	九 34	九 35	九 36	九 37	九 38	九 39	九 40
偶然的要因	二 132	二 133							
偶然的要因	九 38								
句末字	三 32	三 194							
句末	五 157	五 186	五 197						
句頭	五 144	五 187	五 197						
句中	五 144								
句首	五 144								
「ク」表記(喉内入声)	二 96								
句と句	二 49								
べき喉内入声字	六 190								
「ク(キ)」と表記される									
口伝	四 13	四 14							
句読	五 157	五 184	五 186	五 187	五 188	五 189	五 190	五 191	五 192
の異同	十 129								
句読点	二 267								
訓(仮名)	九 102								
の差点者	九 90								
「が二つ以上並んでいる場合	七 224								
訓(仮名)	九 102								
の形態「、」・「。」	九 94								
の並記	二 29								
訓漢字	二 136								
の固定	七 91	七 81	七 83	七 89	七 92	七 93	七 95		
訓漢字動詞	五 69								
の類	四 102	四 126	四 127	四 128	四 129	四 130	四 131	四 132	四 133
軍記物語	五 115								
軍記物語	五 115								
訓話の方法	五 160	五 161							
訓読語	八 211								
の異同	八 117								
の歴史	十 127	十 132							
訓読語	四 92								
訓読語形	六 77	六 79	六 80	六 81	六 83	六 84	六 86	六 88	六 89
訓読特有語形	十 48								
訓読伝受	八 213								
字の用法	二 44								
に於ける「井」「竝」	二 44								
訓点資料間の年代差	二 50								
訓読における字訓	十 126								
における諸注の利用	八 119								
における注釈書の利用	八 117	八 125							
三 5	三 6	三 7	三 8	三 9	三 10	三 11	三 12	三 13	三 14
三 15	三 16	三 17	三 18	三 19	三 20	三 21	三 22	三 23	三 24
三 25	三 26	三 27	三 28	三 29	三 30	三 31	三 32	三 33	三 34
三 35	三 36	三 37	三 38	三 39	三 40	三 41	三 42	三 43	三 44
三 45	三 46	三 47	三 48	三 49	三 50	三 51	三 52	三 53	三 54
三 55	三 56	三 57	三 58	三 59	三 60	三 61	三 62	三 63	三 64
三 65	三 66	三 67	三 68	三 69	三 70	三 71	三 72	三 73	三 74
三 75	三 76	三 77	三 78	三 79	三 80	三 81	三 82	三 83	三 84
三 85	三 86	三 87	三 88	三 89	三 90	三 91	三 92	三 93	三 94
三 95	三 96	三 97	三 98	三 99	三 100	三 101	三 102	三 103	三 104
三 105	三 106	三 107	三 108	三 109	三 110	三 111	三 112	三 113	三 114
三 115	三 116	三 117	三 118	三 119	三 120	三 121	三 122	三 123	三 124
三 125	三 126	三 127	三 128	三 129	三 130	三 131	三 132	三 133	三 134
三 135	三 136	三 137	三 138	三 139	三 140	三 141	三 142	三 143	三 144
三 145	三 146	三 147	三 148	三 149	三 150	三 151	三 152	三 153	三 154
三 155	三 156	三 157	三 158	三 159	三 160	三 161	三 162	三 163	三 164
三 165	三 166	三 167	三 168	三 169	三 170	三 171	三 172	三 173	三 174
三 175	三 176	三 177	三 178	三 179	三 180	三 181	三 182	三 183	三 184
三 185	三 186	三 187	三 188	三 189	三 190	三 191	三 192	三 193	三 194
三 195	三 196	三 197	三 198	三 199	三 200	三 201	三 202	三 203	三 204
三 205	三 206	三 207	三 208	三 209	三 210	三 211	三 212	三 213	三 214
三 215	三 216	三 217	三 218	三 219	三 220	三 221	三 222	三 223	三 224
三 225	三 226	三 227	三 228	三 229	三 230	三 231	三 232	三 233	三 234
三 235	三 236	三 237	三 238	三 239	三 240	三 241	三 242	三 243	三 244
三 245	三 246	三 247	三 248	三 249	三 250	三 251	三 252	三 253	三 254
三 255	三 256	三 257	三 258	三 259	三 260	三 261	三 262	三 263	三 264
三 265	三 266	三 267	三 268	三 269	三 270	三 271	三 272	三 273	三 274
三 275	三 276	三 277	三 278	三 279	三 280	三 281	三 282	三 283	三 284
三 285	三 286	三 287	三 288	三 289	三 290	三 291	三 292	三 293	三 294
三 295	三 296	三 297	三 298	三 299	三 300	三 301	三 302	三 303	三 304
三 305	三 306	三 307	三 308	三 309	三 310	三 311	三 312	三 313	三 314
三 315	三 316	三 317	三 318	三 319	三 320	三 321	三 322	三 323	三 324
三 325	三 326	三 327	三 328	三 329	三 330	三 331	三 332	三 333	三 334
三 335	三 336	三 337	三 338	三 339	三 340	三 341	三 342	三 343	三 344
三 345	三 346	三 347	三 348	三 349	三 350	三 351	三 352	三 353	三 354
三 355	三 356	三 357	三 358	三 359	三 360	三 361	三 362	三 363	三 364
三 365	三 366	三 367	三 368	三 369	三 370	三 371	三 372	三 373	三 374
三 375	三 376	三 377	三 378	三 379	三 380	三 381	三 382	三 383	三 384
三 385	三 386	三 387	三 388	三 389	三 390	三 391	三 392	三 393	三 394
三 395	三 396	三 397	三 398	三 399	三 400	三 401	三 402	三 403	三 404
三 405	三 406	三 407	三 408	三 409	三 410	三 411	三 412	三 413	三 414
三 415	三 416	三 417	三 418	三 419	三 420	三 421	三 422	三 423	三 424
三 425	三 426	三 427	三 428	三 429	三 430	三 431	三 432	三 433	三 434
三 435	三 436	三 437	三 438	三 439	三 440	三 441	三 442	三 443	三 444
三 445	三 446	三 447	三 448	三 449	三 450	三 451	三 452	三 453	三 454
三 455	三 456	三 457	三 458	三 459	三 460	三 461	三 462	三 463	三 464
三 465	三 466	三 467	三 468	三 469	三 470	三 471	三 472	三 473	三 474
三 475	三 476	三 477	三 478	三 479	三 480	三 481	三 482	三 483	三 484
三 485	三 486	三 487	三 488	三 489	三 490	三 491	三 492	三 493	三 494
三 495	三 496	三 497	三 498	三 499	三 500	三 501	三 502	三 503	三 504
三 505	三 506	三 507	三 508	三 509	三 510	三 511	三 512	三 513	三 514
三 515	三 516	三 517	三 518	三 519	三 520	三 521	三 522	三 523	三 524
三 525	三 526	三 527	三 528	三 529	三 530	三 531	三 532	三 533	三 534
三 535	三 536	三 537	三 538	三 539	三 540	三 541	三 542	三 543	三 544
三 545	三 546	三 547	三 548	三 549	三 550	三 551	三 552	三 553	三 554
三 555	三 556	三 557	三 558	三 559	三 560	三 561	三 562	三 563	三 564
三 565	三 566	三 567	三 568	三 569	三 570	三 571	三 572	三 573	三 574
三 575	三 576	三 577	三 578	三 579	三 580	三 581	三 582	三 583	三 584
三 585	三 586	三 587	三 588	三 589	三 590	三 591	三 592	三 593	三 594
三 595	三 596	三 597	三 598	三 599	三 600	三 601	三 602	三 603	三 604
三 605	三 606	三 607	三 608	三 609	三 610	三 611	三 612	三 613	三 614
三 615	三 616	三 617	三 618	三 619</					

訓読法 五141 142 194 107

——の史的变化 八93

——の変遷 十24

訓読文 九161

訓読文的用法 六87

訓法 二55 六64 65 66 7124

——の省略化・固定化 八104

——の統一化 八102

ケ

褻 一89

——の字体 一89

——の書 五51

——の資料 二21

kの促音 二93

敬意の度合 五89

敬意表現 五89 124

佳韻見母 七209

軽隔句 九34 35 36 37 39 44 46

係結法↓かかりむすび 四122 九102

敬語 四116

——の著しく発達した時代 四116

敬語語彙 九99

敬語表現 五108

敬語法 二150

形式名詞 六92

——の後にヤが立つ 八60 65 66 80 81 85

例 「様・方・事」 八86

形式名詞の用法 八78 82 85 86

掲出位置 八149

掲出漢字 二30 三117 119 122

掲出語 七223 224

——の語形の異同 七224

掲出順位 三48 六73 75 76

敬讓関係語彙 一154

係助詞 十19 21 23

——コソと呼応するヨ 七165

——「コソ」の呼応の乱れ 一45

つ形式 七158

——ゾの結びの後にヤが立 七158

——ゾの呼応の乱れ 四27

——ゾ・コソの結び 七173

——ゾ・コソの結びの後に立つ 七155 158

——「ナム」 二75

——のヤの文末用法 七154

係助詞・間投助詞の文末用法 七153

軽唇音化に係わる音韻変化 十169

——に伴う拗介音の脱落 十161

軽声出現の音声的条件 九69

——の状況 九70

——の条件 九75

軽声声点 九52 56

形態 四114

形体部 七224 226

形容詞 三21 37 39 41

——十也 八21 九108 109 112 113 120 122

——十矣 三158 159 165

——の古活用 三164 169 170 五146

——の比率 九112

形容詞訓 二145

形容詞終止形のみによる断言 八14

形容詞連用形ウ音便 三85

形容詞・形容動詞の語幹 七173

形容詞・形容動詞語幹の上に感動詞(アナ・アラ)が置かれる 七159

——十サ 七161 162 163 164

(山田博士の喚体句を構成するノ) 七161

立つ 七155 159

形容動詞 八21

——十矣 九107 109 112 113 114 120 122

——十也 三158 167

——の用法 八83

形容動詞化 九116

計量	五 139	言語位相	八 110	現代語	四 61	語彙史資料	八 5
計量的側面	八 5	言語行為	十 42	現代字体	二 23	語彙の意味	四 104
計量的方法	九 100 124	言語行動	十 42	現代北京官話音	七 211	語彙的な意味の差	四 116
華嚴宗	一 139 三 52 六 34	言語事象	六 11	限定的用法	三 38	語彙的な発音	二 97
月韻	七 211	言語習得期	十 111 113 118 119 122 123	圏点	四 25 五 162 九 56	語彙量	一 144
月上院本	二 8	言語主体	十 42	言表事態(ディクトウム)	七 171	古佚書	七 123
解文	十 38	言語使用の場の相違	十 104	言表態度(モドウス)	七 171	行為主体の意志	五 104
「ケリ」の用法	八 53	言語資料ジャンル	六 17	建保四年	六 71	広韻の体系	七 206 208
の連体形の後例	七 167	言語生活	三 2 10 16	建武年間	四 35 38	広韻韻目	三 62
言と辞の訓み方	五 145	言語的性格の時間的変化	七 179	語と語	二 49	侯韻明母字の模韻化	七 212
原因・理由を表わす「間」	八 94	言語量	九 32 42	そのものに新たに現れたもの	十 35	業韻	七 212
を表わす表現形式	六 67	現行の国語辞典	二 138 148 154	の意義	九 124	広益本	一 132
研究の対象	十 181	献策	五 121 122 123 124	の観点	十 194	呼応語	五 147 八 63 64 65 66
建久六年以降	十 220	原字音の体母音の差	二 96	の意	十 35	喉音	三 64 68
原拠	九 26	謙譲語	二 70 五 115 116	の対立と選択	八 5 216	合音ホウ	一 96
との対照	九 17	文證本	二 8	語彙	八 15	古往来	四 64 66 99
の対訳	九 17 20	原撰本	二 40	の対立と選択	八 15	の語彙	九 99
に更改を加えたもの	九 19	謙態	六 103	語彙研究	二 116 126	廣義の鎌倉時代語	十 6
言語の新形	十 20	現代漢語	四 47	語彙構造	九 100 107 109	講義	六 10 11 13 15
				語彙構造	九 124	講義聞書	三 53 六 5 9 13 14 16
				の特徴	九 124	講義録	一 48
						江家	八 205

江家訓法	八 205						
孝経訓読史	十 132						
口語	十 21						
——の世界から消えた	四 61						
口語性	八 7 22						
口語体の抄物	三 55						
口語的	四 131						
口語的表現	五 70						
口語的文章	四 128						
口語的要素	一 161						
高山寺	三 52 四 13						
——における三宝絵受容	一 13						
——の経蔵	二 3						
高山寺旧蔵	五 12						
高山寺教学	九 56						
高山寺教学集団	六 184						
高山寺経蔵	四 35 七 179						
高山寺経蔵典籍文書目録	九 77 97 94 11 12						
高山寺言語圏	二 7						
高山寺山外本	九 76						
九 80							
効果 (上声皓韻)	二 96						
後世的表記	十 89						
構成の変改	九 20 21						
口承性	八 7 17						
口誦伝承に係る変化	九 192						
口誦口受的	四 61						
喉内・唇内入声韻尾が「一ツ」	七 212						
表記されたもの	二 96 四 51						
喉内入声音	二 101 107						
喉内入声字							
——がカ行子音と連接	四 57						
した場合の促音化							
吳音系字音	十 185 193						
吳音資料	三 61						
吳音声調	十 186						
の句読点	九 91						
高山寺所蔵の血脈類	四 36 40						
高山寺蔵	六 5 23 28 34 40 41						
の鳥獣戯画	五 31						
高山寺蔵古訓点資料	六 91						
92 96 102 104 106							
高山寺蔵本	一 6 九 79						
高山寺典籍文書綜合調査団	二 3 六 92 九 79						
高山寺本	六 96 十 218						
高山寺明恵学統	一 140						
高山寺明恵上人同行	十 11 17						
合字	一 97						
「合」字	二 45						
講釈の聞書	一 49						
口授口誦によつて伝承	十 164						
口誦口伝によつて伝承	九 190						
行動原理に関するマイナスの	四 104						
評価							
口頭語的・口誦的文獻	四 61						
の露呈	十 36						
口頭語的性	八 65						
口頭語的性	十 33						
行動規範意識	五 105 106 108						
行動原理に関するマイナスの	四 104						
口頭の語	三 51 52 53 六 73 八						
8 9 十 19 20 25 27 34 38							
の露呈	十 36						
口頭の語	八 6						
現	六 82						
肯定表現	六 82 83 84						
(否定辞と呼応する) 肯定表							
構文上から見たヤとヨの比較	八 102						
構文の省略化・固定化	一 137						
興福寺法相宗関係者	十 123						
高野山西谷月上院	二 8						
高野山	一 139 四 12 六 37						
公文書	五 106						
公文書	七 155						
高野山西谷月上院	二 8						
合拗音	五 34						
吳音	一 123 二 109 111 112						
の混入	三 63 七 201 九 69 190 十 161						
の声調資料	十 185 192						
の祖系音	二 127						
の体系化	一 124						
吳音一音節去声字の上声化	十 185 193						
喉内撥音	四 57 62 六 190						
高僧書簡	十 17						
後置詞	五 145						
肯定表現	六 82 83 84						
肯定表							
高野山西谷月上院	二 8						
高野山	一 139 四 12 六 37						
公文書	五 106						
公文書	七 155						
高野山西谷月上院	二 8						
合拗音	五 34						
吳音	一 123 二 109 111 112						
の混入	三 63 七 201 九 69 190 十 161						
の声調資料	十 185 192						
の祖系音	二 127						
の体系化	一 124						
吳音一音節去声字の上声化	十 185 193						
喉内入声音	二 96 四 51						
喉内入声字	二 101 107						
——がカ行子音と連接	四 57						
した場合の促音化							
吳音系字音	十 185 193						
吳音資料	三 61						
吳音声調	十 186						

吳音注	一 130	語氣を強調	九 40	古訓の残存	八 206 207 208	コソは主体的判断を強く打ち出すもの	七 166
吳音直読資料	一 124	語氣詞	三 46	古訓法	五 147	古態	一 123 138
133 185 193 195 197		語義の比較研究	二 136	語源	十 26	——のオとラ	一 51
吳音伝承方法	一 137	語義・用法	二 154	語源意識	十 71	——のオとラ	一 51
吳音平声軽	九 74	語義・用法上の差	三 96	語源的用法	十 26	——のオとラ	一 51
吳音読	六 189	語義上の対応・相関関係	二 136 391	個々の漢字を「よむ」	三 20	——のオとラ	一 51
吳音読みから漢音読みへの交				古語	五 136	——のオとラ	一 51
替	四 99 103	古紀伝点	七 124	古語法	五 148 149 160	——のオとラ	一 51
吳音読訓点資料	十 185	古記録	三 167 170 174 77	五山僧	九 192	——に「お」が来る場合	三 4
吳音読語	四 103 104 116 91 72 74	語句の解釈を主とした仮名抄	二 86	古辞書	十 15 72	——に促音を有する多数の漢語	四 47
吳音読資料	一 122	語句の順序——日本語の語順	五 53 54	小島(流)	六 37	語中・語尾に於けるハ行音とワ行音の統合	十 104
吳音読誦経典	六 189	と漢文の語順——	八 33	誤写	十 37	語中尾のハ行音ワ行音	四 48
五音博士	六 191	語句集	三 11	語種移相	八 5	固定訓	三 106
語幹が仮名表記(漢語サ変)	二 139	国語として無理な構造	六 83	古宗派	二 49	古典仮名遣	十 69
語幹部分が三乃至四の漢字から成る漢語動詞	一 158	国語史	六 91	個人による用字意識	三 171	語頭	十 69
——が二字の字音語から成るもの	一 151	国語史記述	十 124	個人差	一 122	——のア行とワ行の混同	十 69
——が和語と字音語との複合形態から成る漢語動詞	一 158	国語史研究の資料	五 35	個人的な用字法	八 86	——のオとラ	一 51
——が和語と字音語との複合形態から成る漢語動詞	一 158	国語史研究資料	三 16 13	個性の差	十 124	——のオとラ	一 51
——が和語と字音語との複合形態から成る漢語動詞	一 158	国語問題	九 77	个性的語彙相	八 5	語頭濁音としての「無」の表	四 116
——が和語と字音語との複合形態から成る漢語動詞	一 158	国書(俗書・仏書・和歌)	三 51	个性的表現	五 97	現価値	四 116
——が和語と字音語との複合形態から成る漢語動詞	一 158	国書(俗書・仏書・和歌)	三 51	語性	八 5 9 22	——の音価	十 71

語頭濁音語の表現価値	四 116	19 20 21 49 64 66 77 5 78	懇請	5 113	左傍書入注	八 122
語頭拗音	十 70	86 89 90 92 107 6 45 十 86		116 117 120 121 122 123 124 126	三卷本色葉字類抄との共通度	
事書	三 41 四 67 七 72 七 77	法	サ		参照注記	六 133 134 135
〔事形式〕	八 67	法			参照注記的性格	六 172
誤読を避ける	四 24	における表現方法	西院流	六 35 37 40 41	三重敬語	十 97
異なり語数	八 5	における表現方法の基	再帰的用法	五 95	三等介母	七 210
ことばの未分化	九 107 108 109 110 112 113 122	本的原则	再読	二 60	三内入声音	二 94
詞書	八 19	における用法	再読訓	三 40	三内拗音	二 96
語認識	十 194	における和化漢文	再読字	五 146 九 104	三人称	五 96
古博士	六 191	の一樣式	の成立	二 38	山門派	一 138
語尾	十 69	の言語研究	再読表記	二 59	散文	八 9 十 81
古筆の文字資料	十 86	の使命	祭文	四 13 17	散文文献	八 37
古筆切	二 20 十 83	の樣式	佐賀県小城町岩藏寺藏	五 5	三論(宗)	六 34
古風な語感	八 11 12	の樣式論	サ行四段動詞と助動詞「キ」	一 55		
古文孝経説	十 131	を「よむ」	の連接「――セシ」	五 104 106	シ十係助詞	十 23
個別的に發する要因	二 134	古用の用法	させ手	五 104	詞の訓	二 38
個別的にずれる部分	十 162	誤用	させられ手・動作のなし手	五 104	辭の訓	二 38
語法	三 10	誤用と誤写	サ変動詞	二 137 九 113 116	の部分表記	二 38
古本説話集の状況	十 69 73	古来の用法	作法	七 204	字の用法	二 42
語末	十 69	今昔説話の原規	作法・次第	四 13 15 20	使役	五 95 96 97 98 99 104 九 103
胡麻点	四 25 五 162	の文章	作法書	四 8	使役(相)	五 97
古文書	三 1 2 7					

上声点加点(句中)	十 187 197 201	情態副詞	六 71 76 79 80 85 86	使用語彙の差	二 140	初期草仮名資料	十 82
上声「を」	三 83 87	状態を表わす形容詞の後に立		使用度数	七 134	初期物語	八 95
承接機能	三 162 166 171	つや	七 157	使用場面	八 24 26 42	書記用漢字	五 79
上接字(の声調)	九 73 74	声点	三 67 四 15 56 137 五 157	使用頻度	六 77 九 109 112 113	職韻	七 212
上接母字	十 95		158 六 11 127 183 184 186 八 25	使用量	八 24 26 42	職韻字	七 209
上層階級	八 16		163 201 九 52 55 56 十 28 160	声明	一 123 六 186 七 203	植物	五 29
消息	四 13 17 十 54 58	声点(六声)	九 102	声明資料	六 183 186 197	食物名彙	八 216 217 218 219 220
——の常套文句	八 37	——と博士の型の関係	六 192	消滅してしまふ言語	十 5	初掲字	三 27
消息文	六 123	——と振仮名	六 183 186	「消滅」の義	三 99 100	書札様の文書	28 43 48 49 六 75 七 231 232
消息文体	一 145	——の加点法	一 123	抄物書	一 27 85 94 二	書誌	四 36 六 183
消息文範	一 161	——の附された和訓	五 162	抄物書き	四 42 43 44	助詞十也	三 158 165
消息文例集	九 100	——は単点	七 204	抄物	140 四 24 六 19 71 141 八 342	——に続く用法	六 95
上代	三 148 163 六 44 十 164	声点清濁	九 58	常用音	三 51 55 六 5	——「の」を介して熟合した	五 137
——から院政時代に至るまで		声点付和語	四 91 92	常用漢語	一 28	——の連続性	七 154
——に生動した助詞	十 26	声点付きの和訓	七 129	常用漢字	二 138 五 78 81 十 146	助詞助動詞	十 70 80
上代語	八 95	常套句	十 47	常用訓	十 146 147 155	助詞助動詞群の文字遣	十 76
上代資料	八 91 92 97 107	唱導・説話の資料	一 85	省略	六 145 146 147 149 153 159	助辞	五 102 九 40 十 15
——に於ける「并」「竝」		浄土関係の資料	九 126	上流者	十 18	助字	五 146
上代・平安初期資料	二 43	浄土宗	三 52 54	省力化	六 133	——の訓読法の変遷	三 107
情態性の意を有する漢語	六 51	浄土真宗	三 52 54	承暦以前の呉音声調	十 204	——の訓法	二 55 五 143 十 129
	九 116	承平四年	十 104	抄録本	二 85	助字性を喪失	三 107 116
		使用語彙	四 61	書簡用常套句	八 33		

書写	—	43	所定訓	九〇五	類	—	—	—	—
—の伝流	二	13	初等教科書	八三三	女流文学	八二一	新漢音	七一九	二〇二
書写時の心理状態	二	17	助動詞	三二一	女流文学資料	八一三	「新漢音」の祖系音—北方唐	二〇三	二〇四
書写事情	九	54	—	三二五	書陵部蔵本	二六七	代末期乃至宋代初期音	一九〇	—
書写者が長命	十	122	—	159	自立語	七二八	—	—	—
—の個性的態度	十	76	—	166	—と辞	一八三	—	—	—
—の個人的態度	十	76	—	171	—と自立語	五五六	新漢音資料	七一九	二〇六
—の生没年	十	105	—	188	—の仮名表記	五五四	新漢音読	七一九	二〇七
—の年齢	十	124	—	189	—の平仮名・万葉仮名表	七二〇	新・旧の二層	七二一	—
書写上の条件による仮名字体	十	174	—	190	記	七二〇	新訓法	二六五	一四三
—の終止形の後に立つ	七	157	—	190	—の分類	七二〇	新語	一〇四	—
—の連体形の後に立つ	七	175	—	190	自立語表記の年代の変移	七二〇	信仰関係語彙	一五五	一五八
書写順序	七	177	—	190	資料の信憑性	七二〇	真興音	三六一	—
書写年代	七	175	—	190	四六駢儷体	七二〇	真興和音	二〇九	—
書写年代差	五	149	—	190	史論	七二〇	真言漢音	七〇一	二〇二
叙述の形式	九	113	—	190	人為的音	七二〇	真言宗	一三九	—
書状資料	十	81	—	190	唇音	七二〇	—の傳承形式	一三九	—
女性の心話	八	17	—	190	唇音的な促音の音便	七二〇	—	—	—
—の表記の保守性	十	121	—	190	秦音	七二〇	真言宗小野流	四二二	—
女性的用語	八	9	—	190	—の声調体系	七二〇	真言宗御室流	六八五	—
書体	二	15	—	190	—を母胎にした漢音	七二〇	真言宗教団	九三〇	—
書体(字体)	八	85	—	190	—を母胎とする傳承漢音形	七二〇	真言宗系統	七二〇	—
—の個人差	二	17	—	190	—	—	—	—	—

真言宗高野山系統	七 205	唇内入声	二 95			正格漢文的要素	八 94
真言宗所用經典	八 186	の促音化表記	四 62			精神活動に関する語彙	一 151
真言宗僧	九 100	唇内入声音	四 50	隨筆		生成	十 20
真言宗伝承音	七 202	の促音化	一 54	隨筆グループ		正俗通(字体)	一 98
真言宗仁和寺系統	七 204	への類推	四 48	推量(意志)の句		清濁音字	二 127
新視点	十 6 30	唇内入声字	二 101 107 七 212	推量系助動詞ム(ナ・ム、テ・ム)、ジ、ラム		清濁字	六 187
新出の語	十一 11	の促音化	六 189	推量表現		声調	二 110 112 四 52 九 38 40
の高山寺蔵本	一 2	唇内・喉内入声音の促音化	二 92	数・量の少ないこと		の習得	十 180
心情・氣持を表わす	三 47	唇内撥音韻尾	六 190 191	菅原家		への反切の介入	十 180
新資料	十 17	唇内撥音m	一 52	素姓の異なる本文を接合		声調体系	六 186 187 194 七 200
新生の言語	十 5	新仏教	三 52	捨て仮名	五 53 74 六 73 八 59	声調認識	一 133
の語	十一 21	の片仮名交り注釈書	三 54	墨つき	二 17	声調変化	十 186
新生語	三 147	の祖師達の遺文	七 143	セ		星点	八 201 九 56
新切韻の系統	十 165	深密藏聖教	四 6			政府の文教施策	九 77
真俗の交流	十 220	心理動作語	八 10			省文	一 94 97 五 50 八 148
身体代表語	八 13	親戀の方法	二 92	清音		正文	六 156 157
身体部位	三 145 146	心話	八 16 九 8 26	に続く場合は促音化		の漢字「訓」	十 146
身体部位語	八 13	の挿入	九 22			の訓読の異同	十 136
「人体」部	七 223 224 232	心話化	九 26	正音(漢音)	二 109	の字訓	十 155
人体部位に関する語彙	七 224			正格漢文	六 45 47 50 56 57 63 66 十 15	の即字訓	十 144
人体部位名称	七 229					正文漢字の字訓	十 153
新濁	一 125 135						
唇内の入声韻尾	四 48						

正文訓読	139	説経草案乃至記録	1	89	舌内撥音便	18	89	——の表記	5	51
性別	164	説経部	5	51	舌内鼻音	17	73	——の表記	4	102
青年層	123	——の表記	5	66	接尾語	4	26	説話(多く仏教説話) 文体	1	144
正用	380	説教文体	1	144	接尾辞	4	44	説話末尾の常套句的定型表現	3	160
成立の様相	88	接辞の「無」と「無」の音の対立	4	116	——十也	3	166	三	160	172
成立要因	66	対立	4	116	説法唱導	2	76	二	76	34
声類の注	158	接続を表わす表現形式	6	67	説明記事	7	180	189	195	75
昔韻	212	接続語	3	8	説明的意味用法	8	93	96	111	32
昔韻精母	209	——の用法	5	144	全訓送り仮名	5	53	72	75	32
——の表記	109	接続語格	10	26	全訓付訓	5	79	81	91	91
世代差	103	接続詞	2	40	全訓振り仮名	5	54	75	90	40
世代差と表記差	109	接続詞的用法	3	36	前後二つの文を接続	9	122	92	69	29
「切韻」系の韻書	164	接続助詞	6	65	全語彙量	2	69	29	69	29
切韻系韻書	72	——「テ」	2	26	先行説話書	6	152	176	176	176
切韻時代	161	接続助詞的用法	6	44	先行注	4	84	85	85	85
舌音	68	接続表現	4	131	——の場面	4	126	126	126	126
舌音泥母娘母	210	接頭辞の「御」	2	75	——の冒頭形式	4	84	85	85	85
説経	124	舌内入声音	2	91	説話作品	9	110	110	110	110
——と説話	125	舌内入声字	2	105	説話集	1	148	148	148	148
——の場面	126	——「ツ」	2	93	説話性	7	7	7	7	7
——と説話	127	舌内撥音韻尾	6	190	説話内容の詳密化	9	23	23	23	23
——の場面	128	舌内撥音n	6	191	説話場面	3	93	94	97	97
——と説話	129	——	1	52	説話部	6	72	75	76	76
——の場面	130	——	1	52	77	80	81	82	83	85
——の場面	131	——	1	52	81	82	83	85	87	88
——の場面	132	——	1	52	82	83	85	87	88	88

待遇機能差	六 103 104	醍醐寺	四 12 20	体母音 e	二 96	「V」	七 204
待遇表現	五 96 97	の資料	四 43	代名詞下系(下ノ・ドレ・ド		「:」	七 205
「給」	九 17	醍醐寺本	十 218	コ・ドチ)	十 35	「:」	七 205
の比較	二 70	醍醐(流)	六 37	代名詞訓	五 143	「:」	七 205
待遇表現法	六 103 104	第三群点	二 49	濁音	三 66 125		三 50
に係るノ・ガの機能表示	六 104	第三者を主語とする文	八 49 55	濁音及び拗音を表わす類音字	三 67		三 95
待遇表現法上のノ・ガの機能差	六 103	大字	四 23	濁音と拗音とを同時に表示	三 65		二 145
差	三 94	大書方式	八 137 138	濁音に続く場合(促音化しな	二 100		五 103
待遇品位	七 169	対人関係への留意	四 116	い)	二 99		四 67
待遇品位上の相違の一因	七 161	対内的訴えかけ	七 161	濁音の前に立つ促音	三 64		九 34 35 36 38 39 42 44 46
体系	七 202 161	第二群点	二 49	濁音の類音字表記	十 21 26		一 89
体系上の対立点	七 213	第二人称	八 49 55	濁音化	十 28		八 9
体系的にずれる部分	十 161	第八群点	二 49	の理由			九 192
体言	五 102 七 173 121	大般若経の転読・読誦	五 13 17 33 34	濁音専用の類音字注記法	三 67		六 131 132
体言十ノ	七 163	大般若経音読	一 130	濁音表示	三 65		一 90
の後に立つ形式	七 165	大般若経読誦音	二 109	濁音表示法	三 67		十 124
の後に立つ場合	七 161	112 113 118 133 361	二 116	濁音符	三 67 七 127 八 163 201		十 123
十ノ(山田博士の喚体句を構成するノ)	七 161	大般若経本文の読誦音形	二 96	濁字	六 187		三 67
の文選読	八 133	体母音 i	二 116	濁声母の清音化	十 162		十 18
体言相当	十 21	濁点	一 136	談話語	十 18		十 18

伝承読誦漢音	十 180	の用言とを連ねる形式	東寺(真言宗総本山)	九 193	——	——の連体形の後
転接連詞	六 46		東寺・勤修寺関係	九 30	に立つや	七 166
天台漢音	七 200 201 202 209 210 211	問いの表現	東寺観智院	六 9	動詞用法	二 140
天台宗	一 137 249 三 52 四 83	問いの表現(反語表現)	東寺観智院金剛藏	九 193	頭子音	二 96
84 六 34 七 201 203 八 102 九 126	唐の僧		東寺観智院藏	六 19	唐初鈔本	七 119
天台宗延暦寺系統	七 204	当為	20 22 26 27 34 38 41		同世代	十 111
天台宗教学	一 137	同一場面に於ける「キ」と「ケ	東寺観智院本	一 6	同世代人	十 124
天台宗系統	七 206	リ」の比較	東寺経藏	二 3	当代語	十 18
天台宗山門派	一 139		当時の口語的なもの	四 26	東大寺	八 216 九 101 126
天台宗山門派教学	一 138	頭音	——の口頭語	四 27	——の学僧	六 9
天台宗寺門派	一 139	東韻	——の発音を反映	五 35	東大寺三論宗点	七 204 205 九 90
天台宗真言宗の読誦音	七 199	唐韻匣母二等	——の発音を反映	三 84	唐代の長安音	十 162 164
天台宗專用音	七 202	同音字注	動詞	三 21 28 39 四 123	唐代長安音	七 208
天台宗比叡山	九 126	同義・類義	八 21 九 109 112 114 116 119 122	唐代末期西北方音	唐代限定	七 21
天台声明	七 200	同義語	三 159 162 169 170 171	淘汰限定	倒置文	二 22
伝統的な仮名文	九 78	同訓異字の用法	三 158	倒置文	倒置法	四 70
転倒符	五 83	東国に關係する文献	159 161 163 165 166 167 168	倒置法	動的様相	四 125 131
伝聞回想	八 48 49 50 55	東国語	——の古活用	五 146	読点	一 104
伝聞回想(間接経験の回想)	六 114 116	同語反復を避ける	——の比率	九 112	83 84 85 86 87 88 89 90 92	九 81 82
ト		動作・行為の「させ手」	二 137 140 141 142 143 145 148	唐土所撰の類書	動物	八 25
		動作・行為のなし手	五 104	動詞・補助動詞の後に立つや	唐末の支那音	七 199
		動作主	三 94 五 95 96 97	七 156		
		東寺	一 139 九 32			

非連続面	十 38	複合度の高い場合	二 97	武家家訓	七 369	——の作法上の事物に関する	
広沢血脈梅尾流	四 37	複合動詞	十 26	武士層の日常的・通俗のこと	七 369	語詞	四 44
広沢流	六 37	副詞	二 30	ば		仏教歌謡	七 149
品詞別語彙量	九 109 110 112 122	副詞	二 40 31	節博士	六 183 184 186 191 197 205 206	仏教関係聖教類	九 79
品詞別語数	八 5	——の形式	六 191	藤原定家の表記	十 79	仏教史・文化史の資料	五 34
品詞別統計	九 110	藤原定家筆資料	二 21	藤原南家点	四 90	仏教唱導資料	五 50
		(又は副詞的用法)	三 7	藤原日野家	三 133 153	仏教説話集	四 6 119 671
フ		——十矣	三 169	諷誦文	一 123 932	仏書	八 128 114
ふ——う	三 81	——として用いられる「方」	八 58	不整表現(語りらしい)	八 7	——の訓読法	九 106 107
唇内入声字	六 190	——の漢字表記	六 75 88	付属語の万葉仮名表記	七 190	——の訓法	四 90
「富」の字音	四 51	——の呼応語	五 147 148	不濁点	二 100	——の特有語	五 142
「富」を構成要素とする漢語	四 61	——の表記	六 73 75	普通の漢音	七 199	仏書訓読語	五 149
群		——の比率	九 112	普通語	五 115 117 118	——の用語	二 133
諷経音	九 190 191 192	副詞的用法	二 54	——+かし	五 118 119	——の用義	二 134
諷経資料		副詞表記の漢字	一 68	普通語命令形+かし	五 119 124	——の用義	二 134
武器・器具	五 30	副詞法	六 95	普通の音韻変化	十 105 111	——の用義	二 134
複合形	七 171	複声点	三 67 68	仏家による訓み	八 205	——の用義	二 134
複合語	四 71 72 90 107	副助詞	十 10 11	仏家色の訓法	二 67 三 153	——の用義	二 134
——の構成要素		複点	六 188	仏家特有の訓法	五 148	——の用義	二 134
——の生成	十 24	付訓	五 90	仏教で重要かつ頻度の高い用	一 96	——の用義	二 134
複合語下位成分	十 23	付訓漢字	一 84	語		——の用義	二 134
複合助詞						——の用義	二 134

——(音便)	二九	分化拡大	八三	文体的位相差	八七	文末	三 156
部分付訓	五七九 81 91	分化発達	七二 1	文体的特徴	一 144	——の指定の助字	158 160 164 166 169 九 40 46
部分付訓漢字	一 62	文藝的文章	九 102	文体特徴	七 149 150 九 30 40 46	——の指定(断定)の助字	三 158 159 161 163 169
部分振り仮名	五 54	文構造	五 101	文体分析の方法	九 30	——の助字「也」「矣」	三 155
振り仮名	六 184 八 46 九 193	文語体	六 11 12	文体面から迫る方法	二 75	——の特定訴え要素	七 153
——の有無の意味	五 79	文語的修辭法	四 125 131 132	文中	二 156 161 164	——の助字「也」「矣」	三 155
——を附した漢字	一 31	文章の性格の相違	六 44	166 三 32 36 四 70 六 44 66	——の上を承けて下を起す接	——の特定訴え要素	七 153
振り仮名	五 53 七 77	——の類別	三 165	文中接統助詞的用法	六 65	文末形式	七 173
古い音韻体系を持つ世代	十 103	文章語	六 73	——の用法	五 143	——からの類別	七 155
——形が伝誦	三 61	文章語的性格	四 61	文中接統助詞的用法	六 65	文末決定性	七 153
——訓法	二 49	文章語的性格	七 157	文頭	三 30 31 32 36 四	文末詞	七 153
——資料	二 31	文章構成	四 119 120 127	86 五 118 119 六 66 83 十 45	——の源流	——の源流	七 153
文と文	二 49	文章構造	七 179	——に於ける逆接	六 66	文末助詞	七 154
文の接続に関するもの	一 45	文章博士	二 55	——の逆接の意味用法	六 66	文末助字	九 105
文安頃の古文書	五 126	文章用式や用語	十 17	——の強調の語	五 121	文末部	四 124
分韻	十 166	分析的に叙述	七 164	——、文中における意味、用	三 33	文末用法	五 143 144
分韻表	一 125 三 64 68 十 161	分析的表現を総合	八 8	法	六 65	文脈上の解釈作業	九 99
文永以後の鎌倉時代の諸年号	五 17	文節の位置	九 93	文頭接統詞的用法	一 154	分野語彙	十 170
文永・建治の頃	十 13	文体	一 47 四 119 120 127 十 48	文範体	九 113	——	二 20
文化の中心地辺	十 31	——と語彙	一 148	文表現形式	四 25	平安かなづかい	三 90
		文体差	二 136 六 98 八 13 九 8	文法	一 55	平安仮名づかい	

平安鎌倉時代	八八九十	九三〇	四一〇三	の平仮名	四七
の加點資料	一三二	七三二	二四五	の和文	三三
平安鎌倉時代の漢音	一五八	五一一	四五六	の和文以後	六八
平安貴族の發言部	一七	三二〇	二二	平安中期以降	八三
平安貴族社会	一七	三二〇	四七	の片仮名交り文	六六
平安末期	三六九	三三七	八一八	の訓説	九四
平安後期	二二〇	九七八	三二〇	の訓法	二二
院政期	一三	八六	三〇五	の訓點資料	二四
平安後期資料	八四	七二	六五二	平安初期以前の和化漢文	八〇
平安後期末	八〇	七二	五八	平安初期訓點資料	五三
平安時代	九七	四二	三二八	平安初期訓法	四七
平安時代初期	一〇五	一〇	五二	平安初期資料	四
平安時代後期	一〇六	一〇	一〇	平安初期的古語法	六
平安時代中期	一〇七	一〇	一〇	平安中期	三
平安時代後半期	一〇八	一〇	一〇	平安中期資料	三
平安時代初期	一〇九	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一一〇	一〇	一〇	平安中期資料	三
の意味と異なる用法	一一一	一〇	一〇	平安中期資料	三
の言語規範	一一二	一〇	一〇	平安中期資料	三
の散文	一一三	一〇	一〇	平安中期資料	三
の中・後期	一一四	一〇	一〇	平安中期資料	三
平安時代和文系文学作品	一一五	一〇	一〇	平安中期資料	三
平安時代前期中期	一一六	一〇	一〇	平安中期資料	三
平安時代和文	一一七	一〇	一〇	平安中期資料	三
平安時代和文系文学作品	一一八	一〇	一〇	平安中期資料	三
平安時代初期	一一九	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一二〇	一〇	一〇	平安中期資料	三
から後期	一二一	一〇	一〇	平安中期資料	三
の角筆文献	一二二	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一二三	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點本	一二四	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一二五	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一二六	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一二七	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一二八	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一二九	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一三〇	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一三一	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一三二	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一三三	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一三四	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一三五	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一三六	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一三七	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一三八	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一三九	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一四〇	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一四一	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一四二	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一四三	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一四四	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一四五	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一四六	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一四七	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一四八	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一四九	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一五〇	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一五一	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一五二	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一五三	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一五四	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一五五	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一五六	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一五七	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一五八	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一五九	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一六〇	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一六一	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一六二	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一六三	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一六四	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一六五	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一六六	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一六七	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一六八	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一六九	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一七〇	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一七一	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一七二	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一七三	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一七四	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一七五	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一七六	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一七七	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一七八	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一七九	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一八〇	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一八一	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一八二	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一八三	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一八四	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一八五	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一八六	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一八七	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一八八	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一八九	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一九〇	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一九一	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一九二	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一九三	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一九四	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一九五	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一九六	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一九七	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一九八	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	一九九	一〇	一〇	平安中期資料	三
の訓點資料	二〇〇	一〇	一〇	平安中期資料	三

——におけるかな字体							
変字意識	三 85	母音脱落	一 54	補助字体			
変字法	三 46	乏韻	七 212	補助動詞			四 122
変体仮名	二 13	〔方〕形式	八 62	〔給〕			四 123
——の草体	五 27	法語	六 112	補助動詞用法			五 125
変体漢文	六 44	傍字	九 40	補助符号			六 183
——に仮名が混用される	六 45	寶志和尚の説話	二 1	——〔レ〕			六 184
場合	七 181	奉書	五 87	発句			九 40
変容	六 67	奉書様文書	五 88	——			九 46
「竝」字には……「横のつな	二 44	宝幢院点	一 137	梵語			六 160
がり」	二 44	方法論	七 7	——の義訳			六 147
並立訓における主訓の位置	二 30	法文類	五 95	梵語音訳語			六 144
並立訓における副詞の機能	二 32	法令集	五 97	梵語音訳字			二 95
「べし」による命令	八 14	墨仮名	五 157	翻字の誤り			八 67
別訓 三 117	118	墨声点	六 184	翻字注			七 100
別訓として並記	五 135	墨点仮名字体表	七 9	翻字論			十 69
別個の文字概念	十 78	墨筆訓 三 135	136	本濁			一 125
別名	八 25	141	143	本動詞			九 107
別名の使用場面	八 33	145	149	本邦への伝来			十 159
別名の使用量	八 31	152	153	本邦撰述音義			二 130
別名の性格	八 24	159	162	本邦祖師による教義書			七 143
偏在分布	六 96	162	162	本文の異質性とその素姓			八 134
	九 8	法相(宗)	六 34	本文の首部			四 69
		母音交替	一 53				
		母音の前に立つ促音	二 99				
		似に伴う転換	四 48				
		母音との調音部位の類	一 53				
		母音uとoとの交替	十 202				
		「方」字の訓	八 84				
		保延頃の呉音声調	八 84				
		「方」の用字	八 60				
		「方」を合音ホウに当てる	八 58				
		ほーお・を	三 83				
		「方」による引用形式	八 60				
		墨筆訓	三 135				
		法華経読誦	十 202				
		補語	五 101				
		保守的な言語傾向	十 124				
		保守的傾向	十 111				
		法相宗	一 139				
		(南都)法相宗	五 160				
		法相(宗)	六 34				

本文の末尾

四 69

未整備の文章

二 75

本文構成

六 29

未然形の用法

六 100

本文読誦加点行為

二 134

見出並びに注の対応関係

六 126

翻訳文法

三 11

マ

マイナスの評価を表わす語

四 114 115 116

マ行動詞語尾

十 70 72 80

全く付訓の無い漢字

一 62

真名本

十 15

漫句

九 40 46

万葉仮名

一 89 二 13 四 7 8 9

万葉仮名宣命体

四 8 21

万葉仮名注

三 66

御教書

五 88

見消符

四 137

ム

「む」の仮名

十 68 69

「む」を用いた語

三 5

「む」表記

十 71

「无」から「ん」へ

十 81

「む」「ん」の文字遣

十 68

「む」の「ン」表記

十 85

「む」「無」「ん」三種の仮名

十 69 70

「む・無・ん」の仮名文字遣

十 78

「ん」の仮名

十 68

無声子音に続く場合

二 97

無表記

二 92

「むま」の類、所謂語頭撥音

十 71

表現法

「む」まで

室町時代以後

室町時代以降

室町時代初〜中期

室町時代伝承音

室町中期以降

室町中期十六世紀初頭

室町末期

の用法

室町時代末期の意味用法

の「類同・例示」

四 82

四 60

四 55

九 78

九 193

二 99

六 64

六 64

六 64

九 78

四 55

四 60

四 82

メ

「——名」注記

名詞

名詞十矣

名詞十也

——として用いられる「方」

の資料

する漢語の音と意味

の字書類

の資料

の字書類

の資料

の資料

五 111

五 126

九 78

六 64

六 64

六 64

九 78

九 193

二 99

六 64

六 64

九 78

四 55

四 60

四 82

四 55

九 78

九 193

二 99

六 64

六 64

六 64

九 78

四 55

四 60

四 82

——の比率	九一〇	文字觀念	一〇二	——の成立	八二八		
名詞訓	二四八 五四六	文字生活	四七 六一	問答	六一二	ユ	幽韻の尤韻化 有識者の習慣
明治以降	九七 七八	文字づかい	三九〇	ヤ			有識者の習慣
名文	三二一	文字遣	十 六八 六九 七九	ヤが対内的訴え	七五五		有声音音に続く場合
命名的意味用法	八九三	——の必要度	八六	ヤによる詠嘆の訴えかけ	七五五		湯桶読
命令の婉曲表現	九七 一〇一 一〇二 一〇三 一〇四 一〇七 一〇八 一一〇	文字列	八三二	ヤのみが用いられる形式	七六四		夢記
命令形	四七三 五一一 五一六 五一一 五二五	(漢字)	九九九	ヤとヨの意義・機能差を考察	七五五		夢の記述
——+かし	五一一 一一八	物語	一三六	ヤ・ヨともに用いられる形式	七五五		夢の記録
——の後に立つ用法	七一一	物語グループ	九一三	する	七五五	ヨ	ヨのみが用いられる形式
——の用法	六一〇	物語評論	一六	ヤ・ヨに上接する体言の構成	七六一		
命令表現	三六九 七六九 一七〇	「者」とその対象	三〇七	ヤ・ヨに上接する体言の構成	七六一		
目安博士	六一九	「モノ」の対象	三一一	ヤ行江	七六一		
モ		「者」の訓法	七二七	ヤ行音系	七五五		
蒙求漢音	一〇六	「ものなり」表現法	三〇五	ヤ行下二段動詞	二二四		
蒙求読誦音の声調体系	一〇七	「ものなり」表現の系譜	七三三	ヤ行下二段動詞	二二四		
蒙求読誦漢音	一〇七		七三三	ヤ行下二段動詞	二二四		
木簡	一〇八		七三三	ヤ行下二段動詞	二二四		
目的語	一〇八		七三三	ヤ行下二段動詞	二二四		
目睹回想	一〇八		七三三	ヤ行下二段動詞	二二四		
(直接経験の回想)	六一四		七三三	ヤ行動詞関係の動詞・名詞	三三六		
文選	八二二 一二二 一二六 一二八 一二九 一三〇 一三二	文選学	七二九	葉草名	三三六		
文書世界	五八	模範文例集	五三〇		三三六		
模範文例集	八三 四九 一〇九	模様その他	五三〇		三三六		
模様の他	八三 四九 一〇九		五三〇		三三六		
謡曲	四七九		五三〇		三三六		
用言の文選	八三三		五三〇		三三六		
用言送り仮名	五五三		五三〇		三三六		

用語 三 1 2

—における規範意識 三 7

—の保守性 七 155

用語意識 七 187 189

用字 三 1 2 156 163 六 71

用字研究 五 93

用字史 三 172

用字法 三 21 六 45 85 86 九 102 107

用字法研究 六 43

用字法上の区別 七 183

用法が固定 十 21

—の拡大 十 35

寄合書 二 15

寄合書き 十 74

四つ仮名 三 90

呼びかけの語 七 173

—の後に立つ

読添語 七 156 168

—の異同 五 143 144 147 148 八 208 128

依り所とした韻書や音義 十 135 138

二 132

ラ

ラ行音の前に立つ促音 二 99

リ

六声形式 一 134

六声体系 六 187 七 204 205 206

理趣院 二 7

理趣経読誦法 六 185

律(宗) 六 34

立派な漢文句調 三 21

両足院本漢文注 二 83

緑筆 四 137

臨濟 九 191

臨濟宗僧 九 191

臨濟宗花園妙心寺 九 195

繪旨の最古のもの 五 87

臨模 二 55

ル

類音字 三 63 64 66

—の機能 三 66

類音表記 一 96

類型化 十 17

類型的な語句 七 180

類型的表現 七 149

類義(の用法) 二 38

類義・類発想 一 154

類義語 八 26

—の所謂二形対立 十 42

類義字 三 21 50

類似説話 二 75

類推過程 四 51

「類同」表現 四 82

「類同・類似」の表現法 四 81

「類同・例示」等の表現法 六 91 92 98 102 104 106

—の表現法 四 82 93 95

流撰有韻 二 102

—の表現法 四 82 93 95

—の用法 六 92 105

—の終止用法 十 20 33 34

連体形による終止法 一 54

連体格助詞「ノ」 十 26

—を示す助詞「が」 二 78

—を示す助詞「の」 二 78

連体格 十 26

連体面 十 38

接続 五 126

連字体 二 28

連音上の諸変化 三 61

歴史的仮名遣 三 89 90

—との一致率 三 89

歴史的変遷 十 24

歴史物語 十 16

連音上の諸変化 三 61

連字体 二 28

接続 五 126

連体面 十 38

連体格 十 26

—を示す助詞「が」 二 78

—を示す助詞「の」 二 78

連体形による終止法 一 54

連体格助詞「ノ」 十 26

—の用法 六 92 105

—の終止用法 十 20 33 34

連体形による終止法 一 54

連体格助詞「ノ」 十 26

—を示す助詞「が」 二 78

—を示す助詞「の」 二 78

連体格 十 26

連体面 十 38

接続 五 126

連字体 二 28

連音上の諸変化 三 61

連音上の諸変化 三 61

—の構成要素 六 51 67

連綿	二 17	——に用いられる	十 25	「竝」字の用法	二 51	——の附されている漢字	五 129
連綿草	一 88	若い世代	十 104	和化漢文体	二 75 五 83 九 113	——の並記	三 118
連用格助詞「ト」	十 26	和化した用法	六 83	和化漢文中の仮名の混用	七 177	和語	二 137
連用形の用法	六 95 105	和化漢文	二 37 三 155 163	和化漢文的表記様式	七 196	和語	三 48 146 八 17 18 19 20 22
連用修飾	六 93 95	和化漢文資料	八 94	和化漢文独自の用字法	三 155	和語(自立語)	九 108 113 114 116 117 119 120 122
連用中止法	八 21	和化漢文資料	八 94	和化漢文特有語	三 10	和語(自立語)	五 53 63 68
口		和化漢文(変体漢文、記録体)	八 46 九 110 113 十 15 37 38	和化漢文用字史	三 155 172	和語(辭)	五 53 64 70
労力が軽減される	五 63	和化漢文(変体漢文、記録体)	三 21	和化事象	六 190	和語(自立語)の片仮名表記	九 122
六年間にこのような変移が生じたのか	七 196	——に特徴的とされる語	八 94	和化度	一 123	——と漢語との比率	五 63
露骨な語	八 18	彙・語法	八 94	和漢の典拠	十 65	——に於ける一音節去声	十 205
呂調	六 196	の漢字用法	六 44 50	和漢混淆体	十 50 65	——における促音表示法	二 91
ワ		(変体漢文)の用字	五 78	和漢混淆文	三 169	——に近い漢語	八 20
ワ・ア行音の表記	三 90	研究	五 78	和漢混淆文資料	五 126 六 88 十 37 64	——の宛字	一 50
和音	三 61 66	の用字法	二 38	和訓	104 106 108 109 110 111	——のアクセント変化	十 205
——の表記体系	三 61 67	和化漢文訓点資料	九 107	ワ行下二段動詞連用形	三 87	——の仮名書	五 68
和音注	一 130 三 63	和化漢文訓点資料特有の訓法	九 105	和訓	二 137 五 128 129 132 133 134	——の促音便	二 93
和音分韻表	六 136 八 145 146 147 148 150 154	和化漢文研究	六 43	——と漢字との関係	十 153	——の中にとけこんだ漢語臭	三 86
和歌	八 8 12 14 15 58	和化漢文資料	八 94	の掲出順位	三 128 129 132	の薄い語	三 26
——に限られる	十 57	和化漢文資料	八 94	の語形	五 129	の副詞	三 26
		に於ける「并」	104 105 107 108 109 110 99 116	の受容	五 128		

——を表記	三 26	和文語系	六 76				
和語化	一 161	和文資料	八 62				
和語漢字表記の誤用例	五 64		78 94 96 109 九 110 112				
和語自立語語中	七 70 80	和文体文章					
和語自立語語頭	十 70 80	和文調	十 41				
和語動詞	二 136 150 152	和文的用法	八 76				
——と漢語動詞との相関	三 91 96 99 101 五 101 102 106	和文特有語	六 80 82 83 86 87 88				
和語表記の漢字	一 105	和文特有語形	六 76				
和讃	四 13 17 17		77 87 88 七 187 九 10 十 47				
話者の違い	十 92	和文脈	48 49 50 57 64 65				
和制漢語	八 17 20	和文脈基調	50 52 54 55 57 60				
和版大般若經	五 8	和名	五 81 八 6 7 15 16				
和風	六 45	割注	八 12				
和文	三 2 10 169		一 123				
和文系	八 64 65 85 九 78 79 十 37	中	四 88				
——の語	四 26	ゐ——い	七 9 八 163 165				
和文系語彙	八 9	エ	三 85				
和文系文学作品	九 8						
和文語	一 123	ゑ——え・へ	三 86				
	四 26						
	六 77 79 80 81 九 10 十 42						

『鎌倉時代代語研究』(第一輯〜第十輯)索引(一) (レ・ロ・ワ・キ・エ・ヲ・ン)

「ん」を用いた語 三 5
「レ」(音便) 十 31 32
「レ」表記(唇内入声音) 二 29

「レ」符号 二 96 102 三 67 68
「ロ」専用仮名 十 86
「ワ」 「ん」 十 75

n——の表記 三 6
「w」 「む・無」 十 75
m n の区別 十 85
m と n との混同 一 52
m・n の混同 二 96

m (ム) と n (ン) との表記 三 6
「コト点」(明経点) 十 144
「コト点」 七 9 八 163 165

「コト点」(明経点) 十 144
「コト点」 七 9 八 163 165

「コト点」(明経点) 十 144
「コト点」 七 9 八 163 165

「ん」が特殊音素表記 十 81
「ん」の仮名 十 69
「ん」の古用 十 98

「ん」が特殊音素表記 十 81
「ん」の仮名 十 69
「ん」の古用 十 98